

第6回 科学者委員会 研究評価分科会 議事録

1 日時 令和5年2月3日(金) 10:00~12:00

2 場所 オンライン会議

出席： 武田 洋幸、三成 美保、林 隆之、藤井 良一、小林 傳司、松下 佳代、溝端 佐登史、古谷 研、相田美砂子、木部 暢子、高瀬 堅吉、松尾由賀利、松中 学、竹中 亨、佐々木 結

オブザーバー：新澤 裕子（東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室 URA）
押海 圭一（人間文化研究機構特任助教）

3 議題

(1) 報告について

(2) その他

武田委員長：

- 資料1 審議経過。意思の表出申出書、提出済み。確認いただきたい。

林委員：

- 項目別に報告書方針について説明
- 参考資料1は、文字起こしをベースに協力者の方々に整理いただいたもの。今日は方向性を議論いただきたい。
- 2.0 社会的意義について。時間の関係で聞けていないところもあるのと、委員長などに分野を代表しているわけではないが語ってもらったことを入れていいのかがどうかご意見うかがいたい。
- 2.1 は事例をカテゴライズしてみたもの。
- 2.2 はプロセス。今後支援しようとするところの理解が重要。インパクト自体の測定は難しいので、プロセス、途中の展開を測定せざるを得ない。だがカテゴライズするところまでは至っていない。
- 3 評価のあり方。課題は何かについて。
- 3.2 若手、3.3 総合知・自然科学との連携はまだ
- 3.4 か4で、より建設的な評価のあり方について。ここがまだ空白だが重要か。

2.0 について

- インタビュー結果から各分野の社会的意義として定義を記載するのは難しいため、項立て・タイトルを変えた上で、参照基準の中で書かれている学問の特徴、定義として書き出す。少なくとも分科会で合意形成された分野の特徴という形を示し、次の項目で出される事例の前提・背景として各分野の特徴を説明。一部社会的意義として使えるような文言は2.1以降で事例と一緒にまとめることも可能か。

2.1 について

- 項目別に行っていることに意義がある。人社研究者としてもこういうこともありうるという自己発見にもなりとていい。一方、重要な観点なので、これが出たときに、色んな分野の人たちがいろいろ出したいと思うだろう。各委員会にはインタビュー内容の加除修正に限りチェックをお願いするか。→中間報告みたいなものと理解してもらえればいいのだろう。研究者がどう捉えているのかをまとめよう、というのが今回の目的。
- 今回は特定の評価に焦点を置くよりは、人社系の評価が絡む場面、学術以外のところまで観点に入れたときにどういうことに注意すべきかという横断的な視座を出すことが目的。チェックリストでなく、ナラティブが求められているとおっしゃったが、それを1.で入れる。そういう国際的な状況を踏まえ、それを入れるとしたらどういう視点がありうるかということを実例的に出せばいい。
- コミュニティ全体でインパクトが出ている、というのが今回出てきた難しいところ。その背景には、人社系の意義が問われる中で分野の存続をかけた内容とも言える。そういう思いをここで出せば、中教審の大学分科会があり、人社系は文理融合を担うものとしか位置づけられておらず弱い立場にある。学術コミュニティとして人社系がどういう意味を持ってきたか示すことが大事だと思う。

2.2 について

- 2.1で類型したようなインパクトがどういう形で生まれるか、どういうプロセスで生まれるかはまだできていない。
- 第4期始まっていて、本来のインパクトは交互作用の産物のはずだが、地方国立大学は研究を放り出して社会貢献に走っている。
- 研究には多様な種類があり、最初から社会貢献を含んでいるものもある。地方大学にいた身としては、協業をしないと存在意義がないと思ってやっている部分もあるだろう。
- 研究と切り離された社会貢献に走っている大学が多いということであれば、長期的研究が社会的インパクトに結びつくこともあると今回のインタビューの結果を出すこと

に意義があるだろう。即社会貢献と結び付けないとか。

- 海外の事例を見てもインパクトという言葉は使っているが、みなそれぞれ。オランダは Relevance、Valorization、価値化という言葉使うところも。オーストラリアは Engagement、結果としてのインパクトは長期でしかわからないから、協業を直接見ようということ。インパクトと言ってしまうと REF に引っ張られているかも知れないが、実際は多様。この4つの異なる概念の整理はどこでもやっていないかも知れないので意義はあるかも。この4つの概念の整理をぜひやるべき。

3. 評価する場合の問題について

- 多様性を強調する。あり方を出すのには慎重を要するが、無しで例示だけ出すとなるとそれこそいろんな使われ方されかねない。
- 今回はヒアリングによる事例を紹介し、人社における留意点を出すのが目的。最後はインパクト評価のあり方というよりは、留意点をまとめる。そのなかには、4つの概念が含まれることがヒアリングからも確認できるという風にできると整合性取れるだろう。
- 基本設計と詳細設計のように抽象的な枠組みの議論をするものになり、おそらく留意点、その辺をまとめることになる
- 報告をまとめるときに、分野として評価視点をまとめるのと個人評価の視点をまとめるのと違うことに留意。研究評価がなんのための評価か、明確になるといい。→基本的には学術コミュニティの評価。
- インパクトの総体が今回初めてわかった気もする。細かいものも大きいものも、こういうのがインパクトと示すことが大事。理系はわかりやすいが、今回インタビューでイメージとして与えられたのはすごく大きく、参照されるものになるだろう
- 2017年学術会議人社提言ではインパクトがあるということは書いたが、具体的に何がということは書けていない。分野別にいろんな事を言ってきたが、各分野がどういうインパクトを持っているのか互いにわからない、ましてや理系の人にはわからない。それが今回事例として出されるのは大きな意義がある。これは前面に出すべき。
- 3.3 総合知自然科学との連携、ポジティブな意見もあれば、ネガティブなものもあったが、焦点がぼやけない範囲でなにかあれば入れたほうが網羅的でいい。
- 科技イノベ基本計画、人社の先生に我々は理系の奴隷じゃないと言われ、その言葉はインパクトがあった。国の考えているものと学術の意味違うということはぜひどこかに入れてほしい。

- (新澤・佐々木)：人社 URA ネットワークで作ったマップについて説明

今後の予定

- 文科省人社特別委員会と、文科省の大学に対する教員評価の調査、状況把握の回を設定の上、3月中に意見を求める荒い案を作成し、4月上旬に分科会開催し、各委員のご意見をうかがい、引用をカテゴライズするところを確認してもらう。
- 哲学委員会は2月中に再設定する。
- インタビューされた方へのチェックは、全体ではなく発言していただいたところのみ。
- エクセル表、もう少しわかりやすくしたものを資料としてつけることを検討。
(事例で代表的なもの・典型的なものを要約的に書くのは、分野別委員会になげて追記してもらうのもできるのではないか。提言をまとめた経験からすると資料をどこまでまとめるかが重要。
- 報告の場合は、分科会からの原案、査読不要。科学者委員会で承諾したら公表。なので7月末でOKだが、分科会の中でしっかり中身の下承をとってというのが大事。
- 引き続き協力 URA にも協力依頼。協力者に関しては、報告書に氏名明記。